のぞいてみよう！ 全国の取組事例

事例 3

誰でもアートを楽しめるように、みんなで考える。

盲ろう者とともにつくる美術鑑賞

山田さん

石田さん

団体名	ボーダレス・アートミュージアムNO-MA （社会福祉法人グロー）
連携団体	NPO法人しが盲ろう者友の会ほか

美術　つくる／見る・見せる／語る　文化施設　視覚聴覚障害ほか

社会福祉法人グローの山田創さん・石田瞳さんにお話を伺いました！

取り組んでいること

社会福祉法人グローが運営するボーダレス・アートミュージアムNO-MAは、2004年に開館し、障害者による芸術や表現を地域に発信してきました。美術館のアクセシビリティ向上の流れに並行し、2018年頃から「鑑賞」に力をいれるようになり、国立民族学博物館の広瀬浩二郎さんや、NPO法人しが盲ろう者友の会のみなさんにご協力いただき、「さわる」アート鑑賞に取り組み始めました。

しかし、取組の開始初期に試みた「さわる」展示は、形の当てっこが中心的な内容になってしまった感じもあり、美術鑑賞として「これでいいんだろうか？」という疑問が残りました。

次にトライしたのは写真の鑑賞です。言葉の説明やレプリカ、触図などさまざまな伝達方法を試しましたが、「さわるだけでは理解が難しい」という意見も出ました。

2021年には障害のある人とともにアートの見方を考え直す「みんなの鑑賞プロジェクト（※）」を立ち上げ、この一環でしが盲ろう者友の会から四人の方にプロジェクトメンバーとして参加してもらいながら、ともに鑑賞方法について考えました。

※文化庁の令和3年度地域と共働した博物館創造活動支援事業の助成をうけ、NO-MAを中核館に位置づけたアール・ブリュット魅力発信事業実行委員会（事務局：社会福祉法人グロー）が実施。

プロセスはこんな感じ！

検討会議を行う

手法を試しながら、フィードバックを受ける形で検討会議を行った。作品をテーブルに置き、盲ろう者、通訳介助者、見えて聞こえる人が対話・触ることを織り交ぜた鑑賞方法が誕生。

→

展示に向けてさらに検討

盲ろう者と、見えて聞こえる人が作品を挟んで対話した記録を、鑑賞した作品とともに展覧会で紹介する展示のプランを検討。

→

企画展で披露！

検討会議を重ねて生まれた鑑賞方法は、NO-MA企画展「79億の他人」でお披露目。障害のある人もない人も鑑賞を楽しんだ。

見ておもしろくて、さわっても楽しい方法で展示したい！
という思いから、展示台のデザインを考えました。

どんな変化や気づきがありましたか?

障害のある人の変化

盲ろう者は社会参加が難しい現状がありますが、**「話し合いに参加できてうれしかった」**という声や、作品鑑賞を楽しんでいただけた様子がありました。また、自身の**認識の変化に驚く**盲ろう者も。例えば、さわった感触から「固くて冷たい」と感じていた作品を、対話を通じて「女性だ」と認識することで、温かみや人間味のあるものに感じ始めたそうです。

支援者の変化

「盲ろう者の**頭の中をのぞいているみたい**だった」という声が。メモや録音をあとで確認できない彼らは、生活の中で言葉が残りにくいけれど、今回は対話の記録を点訳したので、みんなで内容を振り返ることができました。

地域の変化

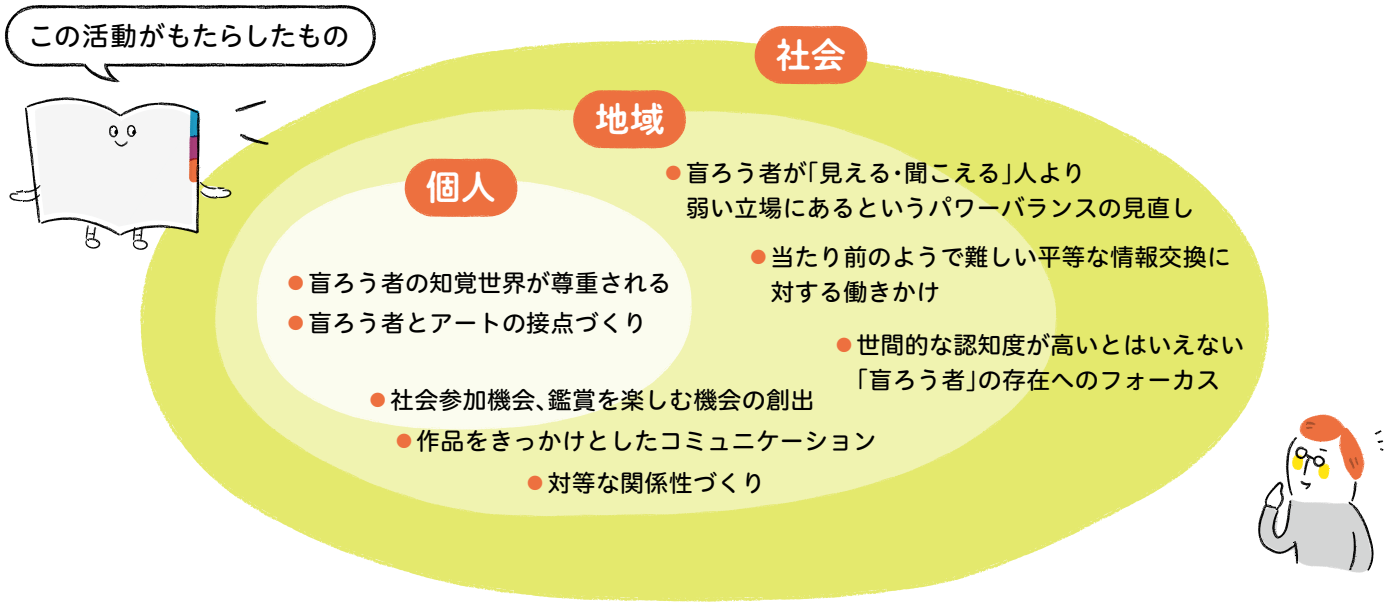
地域の参加者も、**「盲ろう者の考え方を知ることができてよかった」**と言っていました。盲ろう者と地域の方が交流する場面はこれまでも企画してきましたが、今回のプロジェクトでは**「交流できた」**という実感がありました。

企画側の気づき

作品をきっかけとしたコミュニケーションが大事だと思います。正確な「作品伝達」ができなくても、それはそれでいいんじゃないかと思うようになりました。
むしろ、**盲ろう者がキャッチした情報や彼ら独自の知覚を尊重**すべき、という考え方が生まれ、それを支援団体とも共有し合えたのがよかったです。

大切にしている視点

- **「盲ろう」を一つの知覚のあり方と捉える**
  見えない、聞こえない人の鑑賞を「支援する」という考えになりがち。
  大事なのは、対話を築き、異なる知覚世界を交換すること。
- **ともにつくっていくという感覚**
  障害のある人をおきざりにせず、企画の主体になってもらい、
  地域の人たちを巻き込んでいくことが大事。



のぞいてみよう！ 全国の取組事例

事例 4

一人ひとりに寄り添った支援から、社会参加の場づくりへ

障害福祉施設に所属していない人たちへの支援

柴崎さん

伊藤さん

団体名	障害者芸術活動支援センター＠宮城 SOUP （NPO法人エイブル・アート・ジャパン）
連携団体	相談支援事業所、社会教育施設、これらを主管する行政担当課ほか

美術／その他の生活文化　つくる／見る・見せる／語る　文化施設　精神障害ほか

障害者芸術活動支援センター＠宮城 SOUP の柴崎由美子さん、伊藤光栄さんにお話を伺いました！

取り組んでいること

障害者芸術活動支援センター＠宮城 SOUP（以下、SOUP）は、開設当初から、年齢や障害の有無に関わらず参加できる研修や、オープンアトリエを実施してきました。

精神障害のあるAさんは、SOUPが主催する研修に2016年ごろから参加し始めました。Aさんは絵画作品展で入賞した経験もあり、企業から作品購入のオファーなどをもらっていましたが、障害福祉施設に所属していないため、SOUPへ直接相談がありました。企業との複雑な契約に関する弁護士との相談のセッティングや同席など、長年相談に応じてきました。現在、Aさんはアーティストとして全国的にも活躍するようになりました。

SOUPでは、Aさんをはじめ、障害福祉施設に所属していない人たち（在宅障害者）との関わりを通して、どうしたらそうした人たちの居場所や表現の場をつくっていけるか、課題に感じていました。

そこで、2021年度から「スウプノアカデミア」という生涯学習事業を始めました。在宅障害者や企業就労している障害のある人が集まり、防災やSNS、お金、コロナ禍のことなどをテーマに話し、学び合うものです。やがて参加者自らがスウプノアカデミアで取り組んできたことについて、成果発表会で紹介したいという意欲が生まれてくるなど、自発性を大切にした活動が行われています。

また、長年引きこもりだったBさんは、Aさんの作品を見てSOUPのことを知りました。Bさんについて相談支援事業所からSOUPへ相談があり、Bさんとはメールやオンライン通話でやりとりを重ねました。Bさんはオンラインの作品鑑賞会に参加したのち、徐々に外出への意欲が高まり、障害福祉施設への通所を検討したり、オープンアトリエにも参加したりしています。そこでは、参加者との作品を通じた交流が少しずつ始まっています。

SOUPではこうした支援例を通じて、県内の医療、福祉、生涯学習、文化、教育などさまざまな関係機関を集めた協力委員会を開催するなど、連携・協力の必要性も訴えています。

プロセスはこんな感じ！

参加の機会をひらく

SOUPの研修、スウプノアカデミア、オープンアトリエなど、障害の有無に関わらず参加できる事業を展開し、県報や新聞、SNS、「じょうほうスウプ」など多様な媒体で広報。

→

それぞれに寄り添う支援

活動の場では、参加者の自発的な言葉や行為を大切にし、安心して参加できる空間とコミュニティが醸成されている。また、個別のケースに応じて多様な機関と連携し、相談支援を行う。

→

参加者の自発的な活動

スウプノアカデミアでは、障害のある人自ら活動のプログラムづくりや成果発表を行った。SOUPでは支援を通じ、関係機関との連携体制の強化にも尽力している。

どんな変化や気づきがありましたか?

障害のある人の変化

障害のある人には、人と会ったり、話したりすることが怖い、苦手だと感じている人もいます。しかし、**安心して自己開示**ができること、**仲間がいる**ことがわかり、「自分たちでつくりたい」「表現したい」という思いや行動が生まれているのだと思います。
スウプノアカデミアの参加者は、成果発表会で次のように話していました。

「社会には、**行っても行かなくてもいい**、と許容してくれるところは少ない。でもここでは、それをいつも**当たり前に許容**してくれる」

「初めは参加するのが怖いと感じていたけれど、**失敗しても怒られず、うまく話せなくても仲間に入れてもらえる**スウプノアカデミアは楽しい。私のように、悩んでいる人、病気と一人で闘っている人に来てみてほしい。少し体調がいい日、気が向いたとき、出てきてみませんか。」(一部抜粋)

家族の変化

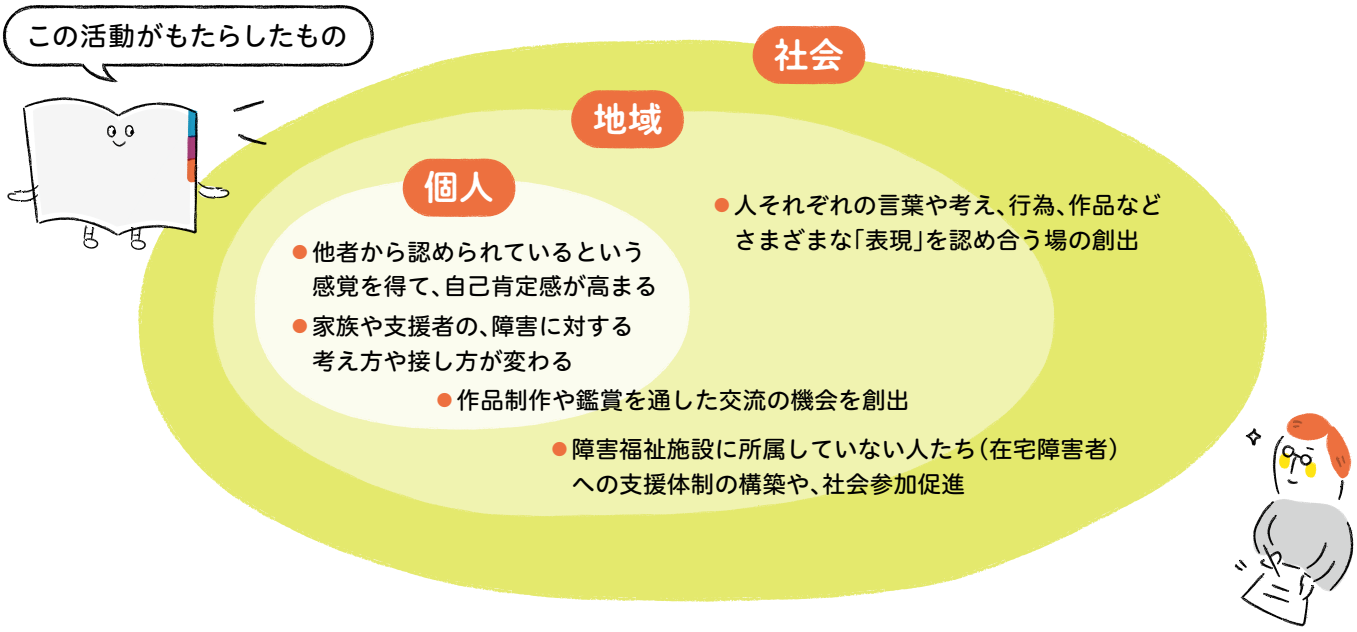
障害のある人の家族は「スウプノアカデミアのスタッフが、本人が自ら話したり行動したりするのを待って、決して否定せず接しているのを見て、これまでの**自分の接し方を見つめ直した**」と話しました。

企画側の気づき

人と人が違うことを前提にして、見たことのない世界や考え方を**すべて受け止める**という、**文化芸術の土台が強み**だと、改めて感じています。
そうした土台があってこそ、参加者が自らのアイデンティティを再確認し、勇気を持って自己開示できる環境や場を、つくり出していけるのではないでしょうか。

大切にしている視点

- **一人ひとりのあり方や表現に寄り添う**
  安心して参加できる空間とコミュニティをひらき、継続していく。
- **障害のある人や家族へ情報を発信し続ける**
  障害福祉施設とのつながりがない在宅障害者には、支援の情報が届きづらい。
  関係機関との連携をはじめ、あらゆる方法と機会を活用する。



まとめ

●障害者による文化芸術活動は、関わる人たちの立場が多様であり、もたらされる変化や意義、価値もまた多様である。

●障害福祉に文化芸術を取り入れることで、個人・地域・社会にさまざまな変化が起こる。

●さまざまな団体が、障害のある人を中心に、家族や支援者、地域の人たちなどと一緒に試行錯誤しながら活動を生み出し、よりよい障害福祉や新たな文化芸術活動へとつながっている。

問い

●4つの事例を知って、どんな気づきがありましたか？
●自分の立場や組織なら、どんな事ができそう、どんな点が難しそうだと思いますか？
●障害者による文化芸術活動がもたらすことのなかで、何が特に重要だと感じましたか？

●事例探究のススメ

それぞれの活動が生まれる背景には、関わる人たちやそれまでの歴史、地域の環境など、さまざまな要素があります。事例とまったく同じことに取り組むのは難しいですが、それぞれが大切にしている視点や、工夫を取り入れることはできるかもしれません。
厚生労働省の障害者芸術文化活動普及支援事業のWEBサイトや、各支援センターのWEBサイト、事業報告書などでは、さらに詳しく活動の背景や道のりが紹介されています。ぜひ参考にしてみてください。

厚生労働省　障害者芸術文化活動普及支援事業
https://arts.mhlw.go.jp/

ワークシート

自分の地域の現場を実際に訪ねてみることも、とても大事です。ワークシートを使いながら訪問の計画を立て、ぜひ実際に見て触れて、話を聞いてみてください。

気になる文化芸術活動を調べ、書き込みましょう

気になるプロジェクト名	気になったところ 聞いてみたいこと	施設名 電話番号	訪問日時 担当者名	備考

質問例

・取組の内容
・活動を始めたきっかけ
・活動のなかで大切にしていること
・関わる人たちの中でどんな変化や気づきがあるのか
・今抱えている課題
・これからやってみたいこと

参考資料

各章の作成にあたって参考とした文献とWEBサイトです。（なお、URLは2022年2月時点のものです）

文献

・九州大学ソーシャルアートラボ（編）村谷つかさ・長津結一郎（企画・編集）『アートマネジメントと社会包摂：アートの現場を社会にひらく』水曜社、2021年。

・長津結一郎『舞台の上の障害者：境界から生まれる表現』九州大学出版会、2018年。

・特定非営利活動法人日本ファンドレイジング協会『障害者芸術文化活動普及支援事業評価ガイド：より良い協働と事業成果を高めるためのヒント集』2021年。

・文化庁×九州大学共同研究チーム（編）『文化事業の評価ハンドブック：新たな価値を社会にひらく』水曜社、2021年。

・山田創『盲ろう者との美術鑑賞：見えない・聞こえない人と美術を楽しむための「理解」「方法」「倫理」』ボーダレス・アートミュージアム NO-MA、2021年。

WEB サイト

・「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」（平成30年6月13日施行）、e-Gov法令検索、2022年3月22日確認。（ https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=430AC0100000047 ）

・「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律の概要」、厚生労働省ウェブサイト、2022年3月22日確認。（ https://www.mhlw.go.jp/content/000502161.pdf ）

・文部科学省、厚生労働省「障害者による文化芸術活動の推進に関する基本的な計画」（平成31年3月策定）、厚生労働省ウェブサイト、2022年3月22日確認。（ https://www.mhlw.go.jp/content/000496312.pdf ）

有識者委員

2021年6月～2022年2月に実施した有識者委員会（2回）にて、本ハンドブックや研修ツールの構成・内容の検討などに、ご協力いただいた方々のお名前です。（なお、所属・役職は2022年2月時点のものです）

大平 眞太郎	滋賀県障害者自立支援協議会 事務局長（社会福祉法人グロー 法人事務局福祉事業部 次長）
鬼木 和浩	横浜市文化観光局 文化芸術創造都市推進部 文化振興課長（主任調査員）
鈴木 励滋	生活介護事業所カプカプ 所長
土谷 享	KOSUGE1-16 代表
吐合 紀子	おおいた障がい者芸術文化支援センター センター長
廣川 麻子	NPO 法人 シアター・アクセシビリティ・ネットワーク 理事長
森 玲奈	帝京大学共通教育センター 准教授

おわりに

このハンドブックは、研修や活動紹介など、誰かに向けて障害者による文化芸術活動の魅力を伝えることを想定して制作されています。ここまでお読みいただいた方は、おぼろげにでも障害者による文化芸術活動の可能性を感じ取っていただけたのではないかと思います。ぜひ今度はその思いとともに、現場に足を運び、実際に活動を体感してみていただければと思います。
本事業の推進にあたっては、インタビューにご対応いただいたみなさま、有識者委員のみなさま、各都道府県に設置されている障害者芸術文化活動支援センターや設置主体となる都道府県、地域ブロックごとの広域支援センター、さらには全国連携事務局のみなさまに貴重なご意見をいただきました。ここに全ての方のお名前をあげることはできませんが、深くお礼を申し上げますとともに、ぜひそれぞれの現場で研修ツールをご活用いただければ幸いです。
本研修ツールの活用を通じて、障害者による文化芸術活動の担い手が広がり、福祉や文化芸術の現場がより豊かに発展していくことを願ってやみません。

NPO法人ドネルモ

のぞいてみよう！「障害者による文化芸術活動」ハンドブック

発行日　2022 年 3 月 31 日

企画編集・発行　NPO 法人ドネルモ
〒 812-0026 福岡市博多区上川端町 9-35 リノベーションミュージアム冷泉荘 B45
Tel&Fax：092-409-5762　Email：donnerlemot@gmail.com
https://donnerlemot.com

発行責任者　宮田 智史（NPO 法人ドネルモ 事務局長）
アドバイザー　長津 結一郎（九州大学大学院芸術工学研究院 助教）［第 1 章執筆担当］
研究メンバー　宮田 智史（NPO 法人ドネルモ 事務局長）［第 2 章執筆担当］
櫻井 香那（NPO 法人ドネルモ スタッフ）［第 3 章 事例 1,4（pp.18-19,24-25）、その他執筆担当］
渡邊 めぐみ（NPO 法人ドネルモ スタッフ）［第 3 章 事例 1,3（pp.18-19,22-23）、その他執筆担当］
堤 明穂（九州大学大学院芸術工学府 芸術工学府修士 1 年（長津研究室））［第 3 章 事例 2（pp.20-21）執筆担当］
デザイン　長末 香織

補助　本ハンドブックは、令和 3 年度 厚生労働省 障害者総合福祉推進事業『障害福祉分野の行政職員等を対象とした障害者による文化芸術活動に関する研修ツールの研究』の成果として作成しています。

* 本ハンドブックは、出典を明記することを条件に利用（転載、コピー、共有等）を許可します。